

万内川・日影沢における地域一体となった取り組みについて ～砂防フィールドミュージアムによる観光・地域活性化～

アジア航測株式会社 ○澤 陽之、小川 紀一郎、船越 和也、染谷 哲久
万内川砂防公園ファン倶楽部

1. はじめに

万内川・日影沢は新潟県妙高市を流れる関川水系矢代川の一支出であり、明治35年（1902年）の土砂災害をきっかけとした新潟県における砂防事業の発祥地として、大正10年（1921年）から現在に至るまで60基余りの砂防施設が設置されている。施設の中には、粗石コンクリートによる石積堰堤や空石積の床固工群があり、現在でもその機能を維持している。特に、大正から昭和にかけて建造された砂防施設については、その歴史的・文化的な価値が認められ、平成15年（2003年）登録有形文化財に登録されている。砂防施設を管理する新潟県は、「万内川・日影沢歴史的砂防施設保存活用検討委員会」を設置し、歴史的砂防施設の保存と施設を活用した地域活性化に関する計画・提言をまとめ、妙高市西野谷地区の地域住民を中心に、県、市、地元企業、NPO 団体、ボランティア等が協力して砂防施設を中心とした観光・地域活性化に取り組んでいる。砂防施設群が位置する西野谷地区では、豪雪と融雪洪水、地すべりといった厳しい自然条件の中で古くから自然と共生した暮らしを続けてきた歴史があり、自然、砂防、農業、暮らし等を含めた地域全体（文化的景観）について、近代から現代までの変遷を実際に見ることができるフィールドミュージアム（野外博物館）として、これらを活かした地域活性化を進めている。

2. 西野谷地区と砂防事業の関わり

新潟県砂防事業の発祥のきっかけとなった大規模な土砂災害は、当時の記録によれば、明治35年5月17日、西野谷地区の西に位置する栗立山（標高1,194m）東側斜面において、大規模な地すべりが発生し、大量の雪塊を含んだ土砂が万内川を堰き止めたことから始まる。この天然ダムは2日後の19日午前8時に突然大音響とともに決壊し、河道閉塞と決壊を繰り返しながら、下流の西野谷地区を襲ったとされている。地域ではこの崩壊を「山のげ」と呼んで伝承されており、崩壊とそれに伴う土砂流出により、下流の西野谷地区では、住宅30戸が全壊流出し耕地が土砂に埋まり、山菜取りにきていた別の集落の女性が1名亡くなるという大きな被害を受けた。大きな被害を受けた西野谷地区（当時は矢代村）では、住民が一丸となって復興に取り組み、明治30年（1897年）に成立したばかりであった砂防法に基づく砂防事業の実施に期待をかけた。財政難により砂防事業の開始は実現せず、ようやく大正8年（1919年）の県議会において、万内川を含む主要河川の砂防工事を大正10年（1921年）度から実施することが決定した。大崩壊の発生から24年の歳月を経て、基幹となる万内川一号砂防堰堤が着工し、万内川本川の砂防堰堤及び日影沢の床固工群の建設が進められた。

3. 万内川・日影沢における歴史的砂防施設

万内川において砂防事業が始まった大正時代は、砂防において技術革新と言われるコンクリートの導入があった。万内川では一号および二号砂防堰堤が粗石コンクリート構造となっている。万内川・日影沢の砂防工事にあたっては、内務省土木局より長野県の牛伏川砂防工事の設計・監督した池田圓男技師が派遣され、技術指導を行っていたことが調査により判明している。万内川・日影沢の計画・施工には、欧州にルーツをもつ砂防技術が導入されている可能性があり、現在でも防災的機能を維持しており文化財として歴史的価値も高いものとなっている。万内川本川は、基幹堰堤である万内川一号砂防堰堤をはじめとして10基の石積砂防堰堤が登録有形文化財として登録されている。また、日影沢では30基を超える石積床固工が階段状に配置され、複数施設により治水上砂防としての機能を発揮するように整備されており、床固工群を一つの評価単位として登録されているのが特徴である。施設の一部は、万内川砂防公園内にあり、現地石材を使用した案内看板を見ながら気軽に砂防の歴史に触れることができる。保存については、保存活用検討委員会において基本的な考え方や施工方法・材料の入手など、技法の継承や再現を含めて検討を行い、保存計画が策定されている。



図-1 砂防フィールドミュージアムの中心
となる万内川砂防公園

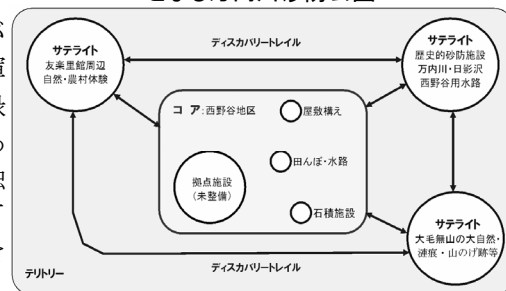


図-2 万内川・日影沢における
砂防フィールドミュージアムの構造

4. 歴史的砂防施設の活用による観光・地域活性化

西野谷地区では登録有形文化財の登録以前から、地域の歴史・伝承を残す取り組みが行われている。「山のげ」と呼ばれる土砂災害から 80 年及び 100 年の節目に記念誌を発行し、当時の住民が書き残した書物や集落に残る伝承をまとめている。こういった地域の地道な取り組みに加え、近年、歴史的砂防施設の登録有形文化財の登録後、毎年万内川砂防公園サマーフェスティバルが開催され、多くの人々が集まるようになってきている。このような基本的な背景と、地域住民によるワークショップや検討委員会における議論を経て、万内川・日影沢の活用計画が策定された。活用計画では、砂防施設によって甦った自然とそれらに守られた集落とが一体となった美しい田園風景－文化的景観－を維持するとともに、その歴史性を広く人々に紹介することを基本的な理念としている。

5. 砂防フィールドミュージアムを中心とした観光・地域活性化の取り組み

万内川・日影沢では、活用計画に基づき、歴史的砂防施設を中心に、既存の観光・地域資源を活用した様々な取り組みが実施されている。平成 18 年には地域住民が中心となり「万内川砂防公園ファン倶楽部」が設置され、各種取り組みの企画・運営、公園の維持管理等を担う中心組織となっている。中心的な施設である万内川砂防公園では親水護岸や現地材を用いた案内板が整備され、実際に石積堰堤に触れながら砂防事業の歴史、技術を学べる場となっている。また、ファン倶楽部メンバーが現地を案内しながら解説する見学ツアーも行われており、フィールドミュージアムとしての機能を十分果たしているといえる。平成 16 年から毎年開催されている万内川砂防公園サマーフェスティバルについては、知名度アップのイベントとしてファン倶楽部を中心に運営されており、地域ならではの食材・資源を活かし素朴で温か味のある「おもてなし」を受けることができる。観光面では、近接する上信越自動車道の新井パーキングエリア（スマート IC を併設）・道の駅からの観光客の誘導や、地元宿泊施設による砂防公園を絡めた催しの開催等、観光資源、社会インフラを有効に活かした取り組みを進めている。

近年では、ファン倶楽部が中心となって、歴史的砂防施設を中心に地域活性化活動をしている他地域との交流も進められており、「寺野の歴史を語る会」（新潟県上越市板倉区、猿供養寺地すべり）や、「田倉川と暮らしの会」（福井県南越前町、アカタン砂防）等の団体と、お互いの地域を行き来し、現地見学会や意見交換会を実施している。

ファン倶楽部の活動については、永年にわたり土砂災害防止施設の保全活動や地域一丸となった砂防事業の啓発活動が評価され、平成 21 年に土砂災害防止功労者国土交通大臣表彰を受けている。

6. おわりに

万内川・日影沢における取り組みは、砂防事業により大災害から復興した地域とその文化を「知ってもらいたい」、「来てもらいたい」、「体験してもらいたい」、「維持していきたい」という地域住民の思いを形にしたものである。砂防フィールドミュージアムを中心に地域住民の手によって地域活性化を図ろうとする先進的な事例であり、今後の更なる発展が期待される。

■本文は、新潟県上越地域振興局妙高砂防事務所のご協力のもと作成いたしました。

表-1 万内川・日影沢の歴史と近年の取り組み

年	取り組み
明治 35 年(1902 年)	粟立山崩壊(山のげ)
大正 10 年(1921 年)	万内川砂防工事着手
大正 12 年(1923 年)	日影沢砂防工事着手
昭和 2 年(1927 年)	新潟県万内川砂防事務所設置
昭和 18 年(1943 年)	新潟県新井砂防事務所設置
平成 15 年(2003 年)	万内川・日影沢歴史的砂防施設が登録有形文化財となる
平成 16 年(2004 年)	砂防遺産とせせらぎのまなび空間整備事業開始(平成 20 年まで) 第 1 回万内川サマーフェスティバル開催(毎年開催)
平成 17 年(2005 年)	・万内川・日影沢歴史的砂防施設保存活用検討委員会設置 ・講演会開催(歴史的砂防施設を活かした地域づくり)
平成 18 年(2006 年)	万内川砂防公園ファン倶楽部設置 歴史的砂防施設現地ツアー開催
平成 19 年(2007 年)	・ふんごみなえシンポジウム開催 ・登録有形文化財パネル展開催 ・妙高はね馬サイクリング同時開催 ・看板作成
平成 20 年(2008 年)	・日影沢床固工修復現場見学会 ・砂防公園周辺整備完成
平成 21 年(2009 年)	・土砂災害防止功労者国土交通大臣表彰(ファン倶楽部) ・赤谷川(福井県)と砂防交流会
平成 22 年(2010 年)	・砂防フィールドミュージアム見学会開催



図-3 万内川砂防公園サマーフェスティバルの様子



図-4 万内川のイメージキャラクターの「カエル」